栞集を読む

松岡　隆子

敬老日道なき道を歩み来て　　中川　敏

まこと、人生は道なき道だ。神のみぞ知る先の見えない道だ。ここまで生きて来ていろいろあったが、可もなく不可もない中庸の道だったとも言えるし、そうでもなかったとも言えよう。〈道なき道〉に生きてきた思いがこもる。敬老の日ならではの感慨が身に沁みる。

秋茱萸のほろほろ渋き人の恋　　中岸　陽子

子どもの頃近所に茱萸の木があり夏になると熟した赤い実を親に隠れてこっそり食べた記憶がある。茱萸は夏のものと思っていた。秋に実るものが一般的のようだが、いずれにしても丸い真っ赤な実は甘酸っぱく、時に渋みが口に残った。〈ほろほろ渋き〉の実感から〈人の恋〉への展開が味わい深い。

拾ひては落し文とふよき名かな　　田中　律子

オトシブミは、夏、楢や櫟などの広葉樹の葉を丸めた中に産卵して地上に落とす。実に巧みに葉を折りたたんでいく様子をテレビで見たことがある。ちょうど巻文のような形なので、「落し文」という名になったようだ。田中さんはいま掌の落し文を開こうかどうか躊躇っている。俳句をしていなかったら「落し文」が昆虫であることを知らなかったかもしれない。だから俳句はやめられない。

（以上12月号より）

師を恋へば月読の山粧へる　　矢作　裕子

立石寺の景観を一望する「山寺風雅の国」に眸先生の句碑〈朝の衣の冷のしばらく百千鳥〉が建立されたのは平成５年。１０４名が参列した盛大な除幕式のことは忘れられない。建立10周年記念吟行会では、新緑の月山の雪渓や水芭蕉に佇んでおられた先生のお姿が目に浮かぶ。〈月読の山粧へる〉に哀惜の思いが籠る。

寺町の花屋の引戸秋深し　　平沢千恵子

菩提寺の墓に詣でる人たちが立ち寄る花屋の佇まいが、〈引戸〉によって確りと描かれている。小さな花屋の引戸を開けて供花を求め、亡き人に会いに行く。〈引戸〉は彼岸への入口なのかもしれない。